

# 留学生とコミュニケーション

医学部 大嶋 眞紀  
教育学部 中島 祥子  
きずな学園 十島 真理

はじめに

鹿児島大学に來ている留学生はどのような留學生活を送っているのだろうか。日頃、留学生との接触が多い立場にいても、大学全体を見渡した場合、二百人前後の留学生が鹿児島での留學生活をどのように感じ、どのように受けとめているかという設問に即答することはそれほど容易なことではない。

そもそも生活に一定の満足感を得るためには、何がもっとも肝要なことかという観点からこの調査のスケッチをはじめたのは一年以上も前のことになる。ロシアの哲学者ミハイル・バフーチンは「生きるということはコミュニケーションすることである。絶対的な死とは、誰にも聞かれない、認識されない、覚えられないということだ」と言っている。(注1)

日常生活の80～90%は何らかの対人間たいじんコミュニケーションに費やされているという説なども考慮すると留学生の充足感を確かめるためには、彼らが日頃どのようなコミュニケーション行動をとっているかという点に焦点をあてるのが早道ではないかと考えた次第だ。

さらにコミュニケーションというと、日本語による意志の疎通ということ誰でも思いつくが、本調査では、人間のコミュニケーションの主要な部分はむしろ非言語的伝達によるのではないかという仮説を基本的な軸としている。すなわち、我々のコミュニケーション行動は基本的には内容的事実と感情の二つを伝えるものだが、事実の方は言語的に伝達される。しかしその割合は極端な場合ほんの数%に止まり、残りは感情を伝える非言語的伝達が大半を占めているといわれている。

従って、本調査では言語伝達のみならず非言語伝達も含めたより大きな視点で、留学生をとり囲むコミュニケーションの状況を探ってみることにした。

具体的には、留学生のもっとも身近なところにいる指導教官は留学生のコミュニケーション行動をどう捉えているか(I)。また留学生自身はどんな言語行動を日々とって、また自分の言語行動をどう内省しているか(II)。また、言語を離れたより心理的な側面や適応という観点からも、留学生のコミュニケーション状況の把握を試みた(III)。

執筆の分担は(I)大嶋、(II)中島、(III)十島である。

注1 : Mikhail Bakhtin, *Speech Centres and Other Late Essays* (Austin:University of Texas Press, 1986)

## I 指導教官から見た留学生のコミュニケーション行動

相手のコミュニケーション行動をどう捉えるか。実はそれほど話は単純ではない。日本人同士で、日本語で話をしても誤解は日常茶飯事である。コミュニケーションの最新のモデルでは、情報源は言語的・非言語的、送信者は意図的・非意図的、チャンネルは口や耳のみではなく五感すべて、さらにノイズ、それも物理的・心理的なもの、さらには受信者のフィルター、過去の経験や態度、価値観、信念、偏見などによって構成された個々のフィルターを無事通過してようやくコミュニケーションが成立したと捉える。これだけの組み合わせでバリアが存在する以上、無事通過する保証はどこにもない。

今回の調査ではこうした点は当然ながら極端に単純化している。すなわちどんな言語を用いているか。日本語か英語かあるいはそれ以外の言語か。どんな場面で、話題は何か。どのくらい困っているか。自分は相手にどのくらい期待しているか。特に日本語の使用についてはどうかなどといったことを回答項目として設定した。

さらに、回答者が客観的に捉えることができる設問と、回答者の主観や期待、視点が影響する設問を混在させている。また、留学生とどのようなコミュニケーションをとっているか。頻度、会話の内容、回答者自身の満足度、さらには教官から見た留学生の自己開示の度合いなども設問に含めた。そうすることで留学生のコミュニケーション行動が明らかになると考えたためである。回答のしにくい設問、長い回答用紙にもかかわらず、在籍留学生183名中123名分の指導教官から回答をいただいた。(回収率67% 1998年8月)

### A 留学生は日本語でどのくらい困っているか

全体的には、日常会話の場面では「まったく問題ない」と観察している教官が最多で40%、それ以外の場面では「少し困っているようだ」が最多回答である。専門について話し合う場面でも、日常会話に続いて、比較的困難度が低いと見ているようだ。

一方、「困っているようだ」の割合が高いのは、論文などを書かせる時が最多で45%、講義を聞かせる時、専門書などを読ませる時、研究会などで討論する時などがそれに続く。日本語を書く際の困難度がもっとも高いと指導教官が見なしているのは予想されたことではある。外国語を学習する際の四つの技能、話す・聞く・読む・書くのうちで最も困難なのは、どの言語種であれ、最後の書く技能であると言われているからだ。

日本語使用を必要ないと考える分野、特に理系教官の回答には、困難度について回答がないものなども見られたが、生活の場が日本である以上、日本語を使用しない場合はかなりの疎外感が予想され、困難の度合いはむしろ高いのではないかと思われる。

### B 留学生はどんな言語を使っているか

留学生の使用している言語は概ね日本語中心である。講義を聞かせる際に特に日本語使用率が66%と高い。ただし、この場合、日本語を使用しているのはあくまで教官であり、留学生は講義を

聞くという受け身的な使用である。話す場面では留学生は主体的に日本語を用いなければならず、「主に日本語、時々英語」という風に英語という助け船を利用して意思の疎通をはかっていることがうかがわれる。困難度についての回答では話すことは困難度が低かったはずだが、使用言語を細かく探ってみるとそれほど容易でもなさそうだとということが判明する。

英語使用の割合は、専門書などを読ませる時に高く「主に英語、時々日本語」などの回答も含めると52%となっている。海外の文献などを考慮すれば当然である。一方、論文などを書かせる時は日本語でという回答の方が多い。読む際の日本語使用率約38%に比べ、書く際の日本語使用率は約50%とかなり高い。この実態は示唆に富んでいる。普通の日本人の感覚では一日に何ページも読む行為を行っており、読むことを通じて情報を収集するとともに、文章感覚も獲得している。留学生は文献は英語で読み、書く時だけ日本語でという言語行動を選択しているようだが、言語習得のあり方としては歪で、執筆の困難度は相当なものではないかと想像される。しかしながら日本人が漢字学習に費やす年数を考慮すると漢字習得が読解の大きな壁であることは言うまでもない。日本語、英語以外には中国語、韓国語、母国語などという回答を含んでいる。

#### C 留学生にどの言語を使ってほしいか

指導教官が留学生にいつも日本語で対応してほしいと期待しているのは、研究室での日常会話、講義を聞く場面などがもっとも高く、専門についての話し合い、ゼミでの発表、討論などの場面がそれに続く。講義を聞く場面では、日本語である必要はないという回答もわずかにあるが、多くは日本語での講義を聞きとってほしいという期待が強い。聞くという行為は外国語の4技能の中ではもっとも受け身的な行為であるため、そのぐらいはできるであろうという予測をもちやすいが、何を聞いたかという確認をきちんと行くと、留学生の理解度がそれほど高くはないこともおさえておくべきではないかと思う。テストやレポート以外の口頭確認など、授業方法により理解を確かめることが必要だ。

逆に、日本語使用の期待が低いのは、専門書などを読む場面で、論文等を書く場面がこれに続く。日本語指導の現場では、書くことの困難さは最大であるが、指導教官の期待度が、書くことについて少し高いのは、レジュメ等の短いものなら何とかあるということもあるのかもしれない。この二つの場面については、「日本語である必要はない」という断定的な回答が他と比べて高く、理系等の学会での英語使用の実態が伺われる。

また、回答の中には可能な限り日本語を使用してほしいが、英語の併用もやむをえない、日本語使用もある程度期待するが、将来的には英語も熟達が必要などというのまである。学会での使用言語に左右されること、日本語習得の難しさなどが背景にあり、かなり多様な回答となっている。

#### D 留学生とどのぐらいコミュニケーションをとっているか

指導教官の多くは週一回以上の接触を保っていると回答している。学内を見渡すと、研究室の中に留学生が居住する空間がある研究室とそうでない研究室がある。従って、接触と言ってもそのやり方は千差万別。パソコンに向かっている留学生、あるいは教官の姿を一瞥するだけの接触から、もちろん実験のやり方に細々とアドバイスを与えたり、あるいは大まかな指示だけを与えて試行錯誤をくり返させたりするなど、一言で接触といっても、教官の指導方法やキャラクターに左右される面が大きい。互いの呼吸が合えば、以心伝心で言葉は不要である場合もある。ある意味では最良のコミュニケーション形態ともいえる。

しかし気をつけなければいけないのは、それが最良であるとする日本人の意識だ。結婚して何十年たっても毎日のように「愛しているよ」と言わなければいけない文化と、そんなことを口にするのは野暮だと考える文化がある。俗に高コンテクスト文化と言われる日本と低コンテクスト文化の国、例えばドイツ、北欧、米国などでは、以心伝心の受け止め方がかなり異なる。

もし、留学生が、状況をそれとなく察知するよりも、明確に言葉で伝達することを重んじる社会からやって来ている場合は、ほんのちょっとした挨拶、「おはよう」とか「お疲れさま」という類の何気ない呼びかけから始まって、日々の実験や研究の場での忌憚のない議論、社交の場での冗談や皮肉など、とてもつきあってはられないと思うぐらいの言語的コミュニケーションを期待している可能性もある。そんな期待にいちいち答えなければいけないというのではない。何といても留学生は自分の意思で以心伝心の国にやって来たのだ。

しかしだからといって、郷に入っては郷に従えとばかり、こちらのやり方で押し通すことにも無理がある。言語によらずに伝達が可能だなどとは夢にも思わない文化的背景の中で育ってきた人々には、それなりの訓練、こちら側が意図というものを非言語的に伝えているということのをわからせる雰囲気作りも必要なのだ。そのためにもある程度の接触頻度、時間が必要になる。

もっとも、接触頻度だけでは捉えがたい側面があることも否定できない。例えば、一月に一回しか接触がない、あるいは問題がある時のみ接触するという回答もあったが、それをもって、接触が不足であると断定することはできないと思う。要は質の問題なのだ。

接触頻度が高くても、教官がいつも叱責するとか、一方的に話すなどの場合、留学生はコミュニケーションをとっているという感触は得られない。同じ叱責するにしても、留学生と正面からきちんと向き合っているかどうか。相手の顔を見て、コミュニケーションをとっているかということが問題となる。また叱責した後の励ましも必要だ。

#### E 留学生とのコミュニケーションにどのぐらい満足しているか

指導教官の側の満足度を尋ねた。日本語で話す時の満足度はとても高い。80%の回答が多少とも満足であると答えていた。日本語以外の言語では半数近くに数値は下がるが、いずれにしるかなり

満足している様子が伺われた。

コミュニケーションというのは多くの場合、双方向的であるといわれている。従って、一方の満足度が高い場合は、他方の満足度もある程度は比例するものと考えることができる。しかしそれは留学生側の回答を見てはじめて判断できる推測である。

自由記述による回答は、数量的な解釈はできないが、コミュニケーションの質について一定の推測が可能だ。留学生は日本人学生よりはまじめで礼儀正しく好感がもてるという回答が基本的な色彩だ。

その色彩の上に、各種の否定的コメントが上塗りされる。協調性が足りない、遠慮がちで本音を言わない、プライドが高く、言語によるコミュニケーションが不足などというもの。おやっと思う。語らぬ文化のはずの日本人の側が言語的伝達を要求している。興味深い現象だが、十分考えられることだ。以心伝心、すなわち高コンテクスト文化の国は日本だけではないからだ。

そのようなコミュニケーションの壁にぶつかると、解決方法として注意を与えたりするが、それでも勘違いに終わったり、関係修復が容易ではないなどという指摘もあった。日本語の理解に関わる記述もある。講義が理解できているのかどうか、文献が読めない、修士論文を書くという意気込みが途絶えていったなどというのものもある。

コミュニケーションに関する設問でも当然ながら、言語の壁がまず第一の問題と受け止められている。さらには礼儀、行動様式、性格、価値観などが関わってくる。しかしながら全体としては、様々な障壁にも関わらず、総じて教官の側からは留学生とのコミュニケーションはどうか良好に保たれていると把握されているようだ。

F 留学生はどのくらい自分のことを話しているか。

研究内容、専門の授業、学業生活のことなどがもっともよく話されている。当然といえば当然。その合間に日常生活や雑談などをたまに交わすという回答が目立つ。個人的な悩みなどは話さなくなる。さらに自分の否定的な状況についてどの程度指導教官に相談をもちかけているかを尋ねた。

学習や研究の価値については「よくはなす」という回答が比較的多い。健康に関わる悩み、心や情緒に関わる悩みは「たまに話す」程度。日本語や外国語能力についての悩み、経済的な困窮についてはもっともよく話すようだ。互いの人格に関わらない、自己開示のしやすい話題だといえる。対人関係の悩み、日本の文化様式への不適応、住居についての不満なども「たまに話す」人が多い。

しかしながら、多くの項目について「ぜんぜんはなさない」が全回答中の約半数を占めているという事実も一方ではある。留学生は寡黙なのか。日本語のせいで自由にコミュニケーションがとれないのか。もちろん研究室内で際限なくおしゃべりする必要はないが、普通の人間が交わす程度のコミュニケーションを、周囲の日本人と潤沢にとれているか。誰もが多忙な中で、コミュニケーションによる解放感、充実感を同国人以外ともある程度保持しているのか。気になるところである。

〔まとめ〕

指導教官は留学生のコミュニケーション行動をどう見ているかというのが基本的なテーマであった。留学生はどうか日本語で話をしている、しかし文献は英語。論文を日本語で書いてほしいけれど、かなり困難なようだなどといった大まかな結論は調査以前からある程度予想されていた。予想を越えたことは何か。それは総じて教官側のコミュニケーションに対する満足度が高いということ。次章に記される留学生側の把握の仕方、視点に興味を持たれるところだ。

さらに自由記述の中にはコミュニケーションに関わる重要な指摘がいくつか見られた。留学生のバックグラウンドが異なるので画一的な教育は好ましくない、手作りの研究方法、教育方法が必要。教室全体でコミュニケーションを図っているなどという改善論、方法論などが目についた。いずれも指導教官自身の視点なり手法が濃厚に滲み出ている回答だ。日本語教育の充実を訴える指摘もちろんある。日本に留学しても環境が英語であるという指摘。日本人学生の自己表現力がないことが教官、留学生双方を苛立たせているなどという記述もあった。いずれも極めて重要な指摘であると思う。極め付けは、日本の教育を受ける以上、日本語を勉強し、なおかつ国際的に一流の研究をする、させるべきだというもの。当然といえば当然だが、このような基本的スタンスを教える側の共通項とし、それを留学生側に的確に伝達していくなれば、双方のコミュニケーション状況は基本的には壊れないということを再認識させられた次第である。

(医学部 大嶋真紀)

## II 留学生の言語行動

留学生は日常生活の中でどの程度日本語を使用しているのだろうか。そして、どのような場面で日本語に対して困難さを感じているのだろうか。そのような疑問から、主に留学生の日本語学習と日本語の使用に焦点を当て、日本語学習の実態、日本語に対する困難度、さらには日本語の使用に対する希望なども含めてアンケート調査を行った。ここでは、以上のような留学生の言語行動について報告する。

### A 調査の概要と回答者

留学生に対するアンケート調査の内容は、大きく分けて二つの部分からなる。一つは留学生の言語行動に関する質問、もう一つは留学生活に対する意識に関する部分である。後者についての結果は「Ⅲ留学生の留学生活への意識とコミュニケーション行動」を参照されたい。

アンケート調査は1998年6月～10月にかけて実施した。質問項目はすべて日本語および英語で作成した。アンケートの配布と回収方法は、日本語の授業などで配布し回答を得たほか、学部によっては学生係や留学生係などを通じて留学生に配布し回収を行った。その結果99名から回答を得た。これは調査当時、鹿児島大学に在籍していた外国人留学生約190名（鹿児島大学以外の連合大学院生は除く）の約52%に当たる。

回答者の在籍身分と性別の構成は、表1の通りである。99名中30.3%が女性、67.7%は男性であった。

在籍身分に関しては、大学院生（修士課程24.2%・博士課程31.3%）が55.5%と全体の約半数を占めており、大学院生が多い点の特徴である。以下学部生が21.2%、研究生12.1%、科目等履修生・特別聴講生が10.1%である。

また、回答者の所属学部をみると（表2参照）、工学部が最も多く全体の30%近くを占め、以下農学部約20%、医学部約15%、水産学部約14%となっており、工学部・農学部が約半数を占めている。なお、以上のような在籍身分・性別・所属学部の構成比率は、本学の外国人留学生全体の構成比率とほぼ同じである。

表1 回答者の在籍身分と性別 (人)

	大学院生 (修士)	大学院生 (博士)	研究生	学部生	科目等履修生 特別聴講生	その他	計
男性	19	22	7	15	4		67
女性	5	7	5	6	6	1	30
無回答		2					2
計	24	31	12	21	10	1	99

表2 回答者の所属学部 計99人

工学部	農学部	医学部	水産学部	教育学部	法文学部	歯学部	理学部
28	18	15	14	9	9	4	2

次に国籍については、圧倒的に多いのは、中国で40人。以下、マレーシア13人、インドネシア7人、バングラデシュ5人、韓国4人、フィリピン3人と続き（その他22名、無回答6名）、全体的に中国と東南アジアの国々からの留学生が多いのが特徴的である。これも、外国人留学生全体の傾向とほぼ同じである。なお、滞在年数と同居家族の有無については、滞在年数は1年未満が最も多く44.4%を占めている。1年以上2年未満、2年以上3年未満、3年以上4年未満はそれぞれ10%台であった。同居家族については、27.3%、つまり約3割の留学生がが家族ともに住んでいると回答している。鹿児島大学の場合、大学院生が多く、年齢的にも20代半ばから30代が多いことから、既婚者が多いと考えられる。

## B 留学生の日本語学習歴と現在の日本語学習について

日本語学習歴と現在の日本語学習について尋ねてみた。まず、来日前と鹿児島大学入学前の日本語学習歴については、鹿児島大学に入学した時点で日本語学習の経験が全くなかった学生は全体の19.2%であった。一方、来日前あるいは鹿児島大学入学前のどちらかで学習経験のある者は61.4%、そしてそのどちらでも日本語学習歴がある者は19.2%であった。したがって、今回の調査対象者の約80%は、鹿児島大学に入学した時点で何らかの日本語教育をすでに受けていたと言える。学部生の場合には、通常入学前に半年から1年かけて日本語学校などで日本語を学習しているし、日本語・日本文化研修生なども来日前から上級レベルの日本語を身につけている。また国費外国人留学生（研究生）の場合には、日本国内で半年の日本語予備教育を受けて鹿児島大学に入学してくる場合もある。

次に、鹿児島大学における日本語クラスの受講状況について尋ねてみると、調査当時、日本語のクラスを受講中と答えた学生は55.6%で、「以前受講していた」と回答した学生を含めると90%以上の学生が日本語クラスの受講経験がある。また、現在受講しているクラス（注1）については、学部生や日本語・日本文化研修生などが受講している日本語・日本事情科目（共通教育科目）以外は、初級・中級レベルの受講生が多い。

また、日本語のクラスを受講していることを指導教官が知っているかどうかという質問に対しては、94.6%が「はい」と答えていた。

日本語クラスの満足度については、「とても満足している」「少し満足している」という回答を合わせると83.6%にもものぼることから、日本語クラスの受講者は全体的に満足していると言える。具体的に満足している点を記入してもらったところ、「日本人とのコミュニケーションに役立つ」「会話や聞き取りの練習になる」「教師がよく準備をしている」「教え方がよい」などの肯定的な意見が多かった。一方、日本語のクラスに対する不満や、過去に一度も日本語クラスを受講したことがない理由については、「実験・研究が忙しくて時間がない」「他の授業と重なっている」「時間が合わない」「場所が遠い（医学部・歯学部在籍の留学生）」などの理由が挙げられており、特に大学院生・研究生などは日本語のクラスを受講する余裕がないことがわかる。たしかに、今後日本語のクラスを受講したいかどうか希望を尋ねたところ、希望者は63%であった（回答者55名中）。しかし、「時



間が許せば受講したい」という回答も多かったことを付け加えておく。

## B 場面別日本語の困難度・実態・使用希望について

留学生生活における様々な場を設定し、それぞれの場面における「日本語の困難度」「使用言語の実態」「日本語使用の希望」の3項目について尋ねた。具体的な場面（11場面）と、質問項目・選択肢は次のページの通りである（英訳は省く）。

ここでは、在籍身分により研究学習活動が異なることから、大きく二つのグループに分けて分析した。すなわち、大学院生（修士・博士）・研究生のグループ（以下「院生グループ」と呼ぶ）と、それ以外の学部生・科目等聴講生・特別聴講生等のグループ（以下「学部生グループ」と呼ぶ）である。厳密に言えば、文系と理系における差も大きいと思われるが、全体的に文系の学生が少ないことから、今回は、「院生グループ」「学部生グループ」の二つのグループに分けて比較することにする。

### 1 留学生はどの場面で日本語に困っているか

各場面における日本語の困難度についてであるが、院生グループが特に困難度を感じている場面はかなり多く、「とても困っている」と「困っている」を合わせると、2場面（「1. 日本人と日常会話をするとき」「8. 電話をするとき」）を除き、他のすべての場面において50%以上の学生が日本語の困難さを感じている。特に「3. ゼミで発表する」「7. 論文やレジюме、レポートを書く」「5. 大学で講義を聞く」「6. 専門書や学会誌を読む」「10. 情報を新聞や雑誌等から得る」などは困難度が高い。場面としては、研究学習活動を行う上で必ず遭遇する場面が多いということと、技能的にも「話す」「聞く」だけではなく「読む」「書く」に関して高いレベルを要求される場面で困難度が高い点が特徴的である。これは、院生グループの多くは日本語のレベルが初級の留学生が多いためであると考えられる。しかし、「1. 日本人と日常会話をする時」「8. 電話をする時」では、約70%の留学生は「あまり困っていない」「まったく問題ない」と回答しており、鹿児島大学における日本語教育の効果が表われているのではないかと考えられる。

一方、学部生グループについては、全体的に「あまり困っていない」「困っていない」のほうに回答が集まっており、多くの場面で困難度が高い院生グループとは対照的である。学部生グループの場合、上級レベルの日本語を身につけている者も少なくない。しかし、困難度の度合いは院生グループほどではないにしても、場面としてはやはり「2. 専門について会話をする」「6. 専門書や学会誌を読む」「5. 大学で講義を聞く」「7. 論文やレジюме、レポートを書く」等の場面で困難度を感じており、研究学習活動に関わる場面が多い。上級レベルの日本語を身につけている留学生でさえ、自分の専門分野について読んだり書いたりするためにはより継続的な学習を必要としているのである。

<具体的な場面>

1. 日本人と日常会話をする時
2. 専門について会話をする時
3. ゼミで発表する時
4. 研究会などで討論する時
5. 大学で講義を聞く時
6. 専門書や学会誌を読む時
7. 論文やレジュメ・レポートを書く時
8. 電話をする時
9. テレビ・ビデオを見る時
10. 生活や娯楽についての情報を新聞や雑誌等から得る時
11. 手紙や書類を読んだり、書いたりする時

<質問項目>

いろいろな場面におけるあなたの使用言語について、次の3項目を質問します。選択肢の中から、あてはまるものを一つ選んで ✓ をつけて下さい。

A その場面で日本語を使用するときに、

あなたは困っていますか（日本語での困難度）

とても困っている

困っている

あまり困っていない

まったく問題ない

必要ない

その他

B その場面であなたが使用する言語は何語ですか

（使用言語の実態）

ほとんど日本語

主に日本語で、時々英語

主に英語で、ときどき日本語

ほとんど英語

その他

C その場面であなたは日本語を使いたいと思いますか

（あなたの希望）

いつも日本語を使いたい

時々日本語を使いたい

日本語を使いたくない

その他

2 留学生はどの程度日本語を使っているか

次に各場面ではどの程度日本語を使っているかについてその実態を尋ねた。学部生グループの場合は、どの場面でも70%前後から90%の学生が「ほとんど日本語を使う」と回答しており、日本語の使用率が非常に高い。

また、「主に英語で、ときどき日本語」や「ほ

とんど英語」という回答は多くても10%以下で、英語の使用率が低く、学部生グループは実態としても日本語の使用率が高い。

一方、院生グループに関しては、全体的に日本語の使用率が低くなり、英語の使用率が高くなる傾向にある。技能的には日常会話レベルの「話す」「聞く」などに関しては日本語を使用する機会がやや多いと思われるが、「読む」「書く」に関してや、専門分野について討論したり話したりする場面では英語の依存度が高くなっている。特に「7. 論文やレジュメ、レポートを書く」「6. 専門書や学会誌を読む」「11. 手紙を書いたり読んだりする」「3. ゼミで発表する」などの場面では英語の使用率が高い。院生グループは理系の学生が多いこともあり、専門分野によっては日本語よりも英語のほうが要求されることが多いのではないだろうか。また、もともと初級レベルの留学生が多いに

も関わらず、日本語のクラスを受講する時間的余裕がないこともその一因だろう。また、たとえ日本語のクラスを受講することが可能で、日常生活レベルの日本語はある程度習得できても、「読む」「書く」の技能を高めるのはかなり難しい。これは学部生グループでもある程度の困難度を感じていることからわかるように、「読む」「書く」の技能と漢字の習得には長期間にわたる学習が必要だからである。

### 3 留学生はどの程度日本語を使いたいのか

最後に、場面別にどの程度日本語を使いたいかどうか希望を尋ねた。院生グループの場合、3場面（「6. 専門書や学会誌を読む」「7. 論文やレジュメ、レポートを書く」「11. 手紙を書いたり読んだりする」）を除き、他のどの場面でも50%以上の学生が「いつも使いたい」と回答している。特に希望が多い場面は、「8. 電話をする」「1. 日本人と会話をする」で、約77%の留学生が「いつも使いたい」と回答している。以下、「9. テレビ・ビデオを見る」「5. 大学で講義を聞く」「2. 専門について会話をする」「4. 研究会で討論をする」などが続く。また、「いつも使いたい」と「ときどき使いたい」を合わせるとどの場面でも80%以上の学生が日本語を使いたいと回答しており、日常会話のみならず専門分野に関しても日本語で話したいという希望が多いことがわかる。一方、「日本語を使いたくない」という否定的な回答は少数であった。なお、数値の違いはややあるものの学部生グループについてもほぼ同じような傾向にある。

### C まとめ

以上、留学生の日本語学習と日本語の使用に関して、困難度・実態・希望について大まかにみてきた。日本語に対する困難度については、程度の差はあるものの、多くの留学生は研究学習活動において困難さを感じており、特に院生グループにおいては「話す」「読む」「聞く」「書く」すべてにわたって困難さを示していることが明らかとなった。つまり、日常生活をしていく上では、まあまあ困らないが、専門で日本語を使うのは困難なのである。その一方で、実際の研究学習活動をみると、特に院生グループにおいては、日本語の使用率がそれほど高くない場面もみられ、専門分野によっては日本語の必要性が低いとも言える。日本語クラスの受講率が高くないのは、研究活動が多忙で時間的な制約も多いだけでなく、専門分野で日本語の必要性が高くないことと大いに関係がある。しかし、日本語使用の希望としては、「いつも使いたい」という希望はもちろんのこと、いつもではないにしても「ときどき使いたい」という回答も多く、日本語に対して否定的な意識は持っていない。日本語を学習したい希望はあっても、それらがすぐに学習への意欲につながっていないのではなかろうか。

日本語のクラスを担当して感じることは、日本語のクラスに参加することが、留学生にとって単に「日本語のコミュニケーション能力を向上させる場」という意味を持つだけでないということである。日本語のクラスは留学生にとって、「情報交換の場」であり、ある留学生にとっては「唯一日本語を使う場」であったり、「日本語で自分を表現できる場」であったり、また他の留学生に

としては「何かとプレッシャーの多い専門の研究を離れ、ちょっと一息つける場」であったりするのである。また、教師の側も日本語のクラスを通じて、留学生の抱える悩みやトラブルに気がつくことも多い。このような日本語クラスの「効用」、そして今回の調査結果もふまえながら、今後の日本語教育の方向性を探っていく必要がある。（教育学部 中島祥子）

注1：現在、鹿児島大学で開講されている日本語関係の授業は、主催別に次のように分けられる。対象者・単位などについては表に示す通りである。

主催（実施）	科目名など	単位数×科目数	対象者
共通教育委員会	日本語	1単位×4	学部留学生（必修）等
	日本事情	2単位×3	
水産学部大学院	日本語・日本事情	1単位×2	水産学部大学院生等 （自由選択科目）
留学生交流センター	日本語プログラム （日本語課外補講）	単位なし×24	全学留学生

共通教育の日本語・日本事情科目は、学部留学生の必修科目で、学部留学生のほかに日本語・日本文化研修生や短期留学生なども受講している。水産学部大学院の日本語は大学院生の自由選択科目として開講されているが、他学部の留学生も聴講可能である。留学生交流センター主催の日本語プログラム（日本語課外補講）は全学の留学生向けに開講されており、主に初級・中級レベルを対象に毎学期10クラス程度が開講されている。具体的な内容はP.25「1999年度鹿児島大学日本語プログラムの実施報告（大嶋・中島・小田）」を参照されたい。

### Ⅲ 留学生の留学生活への意識とコミュニケーション行動

本調査の調査対象者は、鹿児島大学の留学生99名である。対象者の内訳については「Ⅱ 留学生の言語行動」を参照されたい。

この論では、留学生のコミュニケーション行動における心理的な側面を中心に捉えている。留学生にとって、学業生活が留学生活の中で最も重要な位置にあることは当然予測できるが、留学生活の満足度を考えるときに、学業生活の成否を問うだけでは不十分であることに気づく。留学生たちは、学習・研究するプロセスの中で、何をどのように感じ、どのような人間関係を維持・形成しているのだろうか。本論では大きく分けて、「学習・研究領域」「心身の健康」「人間関係」「経済問題」そして「指導教官とのコミュニケーション」についての設問を用意した。それらの中で、留学生が抱える心理的諸問題に対する援助の糸口がつかめれば、留学生への教育・指導にとっても有意義であると考えられる。

#### A 学習・研究領域について

本調査の結果、全体として鹿児島大学の研究や勉強が楽しく、満足を感じている留学生が90%にのぼった。研究への意欲も十分（92.6%）で、自分の能力に対する自信もあり（93.8%）、留学の目的がはっきりしている（96%）との、非常に積極的な回答が多かった。また指導教官への指導にも満足しており（90.5%）、学科の学生も熱心に留学生の研究の援助をしている姿が浮き彫りとなった（81.1%）。しかしその一方で、自分の研究や勉強の価値に疑問を抱く留学生や（31.6%）、研究計画の遅れを気にする人（31.3%）、また今自分が受けている授業と研究がうまく結びついていないと感じている人（29.5%）も少なくなく、研究や勉強への焦りや不安も窺える。このことは、留学生のみならず、研究意欲のある学生には起こりうる問題で、やる気（理想）と現実のギャップの中での葛藤が数字として現れたと考えられ、肯定的な回答が高いこととの矛盾と捉える必要は必ずしもない。

このように大半が満足して学習・研究している中で、あまり研究が楽しくなく（11.1%）、大学での研究や勉強に不満を感じている（11.2%）留学生も約10%を占めていることが明らかとなっている。学業生活に不適応が生じれば、留学生活に大きなストレスがかかる懸念があるため、彼らには早急の対処が必要とされる。

#### B 健康や心身の問題について

次に、留学生の身体、および心の健康について尋ねたところ、かなり疲れてはいるが（55.1%）、おおむね健康（86.9%）であり、あまり心の悩みはない（82.8%）という結果が出た。しかしそう答えながらも一方では、「あまりよく眠れない」が56.6%、「ホームシックを感じることもある」が55.7%、「イライラを感じたり不安になったりする」が49.5%、「大学で孤立感を感じることもある」が40.9%など、強いストレスを感じている回答が目立っている。これらのストレスにうまく対処できるかどうかによって、留学生活の満足度は大きく左右される。たとえ強いストレスを感じていても、友人とのおしゃべりや遊びで発散させている人は、それに屈することなく、逆に前進していく力にかえ

ていけることもある。しかし、ストレスと適当な折り合いがつかずに、「自分の心理や精神面での悩みを抱えている」と答えた留学生が17.2%いる。この留学生に対しては、更に心理面でのきめ細かな対処、支援をする必要がある。

### C 人間関係について

留学生の多くは、日本人学生と積極的な交流を望んでいる中で（86.9%）、実際には心を許せる日本人学生の友人がいる留学生はその半分（学内の友人がいる49%、学外の友人がいる55.6%）である。友人のいる留学生は、日本人の家を訪問したり（35.4%）、逆に日本人学生が留学生の家に遊びに来るケース（42.4%）もあり、一緒にパーティーやスポーツ、ピクニック等の集団活動を行うこと（59.5%）もあるようだ。彼らはまた、大学の事務職員とも気軽に話せる（53.1%）等、学内外にわたり、全般的に人間関係がうまくいっている。また、「日本人とあまり積極的につきあおうとは思わない」留学生もいる（13.1%）ことも含め、鹿児島大学での人間関係には76.5%がまあ満足しているようである。

しかしながら、約25%の留学生は満足していないことも明らかになっている。その原因としては、コミュニケーションが留学生が望むほど潤沢ではなく、学業生活や異文化の中で抱えたストレスを解放する手段が制限されているところにあるとも考えられる。51%の留学生が、心を許せる日本人学生の友人があまりいないと感じており（うち「全然いない」14.3%）、また心を許せる留学生の友達がいないとの回答も8.1%あった。これらの結果は、留学生の人間関係に大きな不安を感じさせる。

「対人関係で悩んでいる」と答えた留学生も18.4%にのぼった。

### D 経済問題について

留学のための費用、すなわち生活費は留学生生活を支える一番基本的な問題である。留学生にとって「経済」がどのような状況にあるのかを尋ねた。複数ある場合には、全体の占める割合を記入してもらうはずであったが、割合を記入していない回答があったため、ここでは、種類についてだけ言及する。

まず生活費の出所が、一カ所しかない場合は99名中76名で76.7%。それ以外の23人は、複数で生活費を賄っている。生活費の出所が一カ所の場合、日本政府（文部省）奨学金が45%、本国政府奨学金11%、その他の奨学金8%で、計64%は経済に不安がない。奨学金を受けながらアルバイトをしている留学生も8%（文部省2%、他の奨学金6%）いるが、安定していると考えてよいだろう。

しかしながら、アルバイトのみ（3%）、自分の貯金のみ（2%）、アルバイトと貯金、仕送り等の複数組み合わせで生活している（15%）、家族からの送金（4%）、その他（4%）、計28%については、経済基盤が不確実で、留学生活への不安の一端になっている可能性がある。

## E 指導教官とのコミュニケーションについて

留学生の研究生活に大きな影響を与えると考えられる指導教官とのコミュニケーションについて、留学生側から調査を行った。指導教官側のアンケート結果とあわせると、留学生の実態が見えてくる。

### 1. 指導教官との接触について

a：【接触頻度】 指導教官との接触頻度は、数値での回答を要求したものの、一概には表現できなかった。留学生、或いは指導教官によって、接触の頻度は大きく異なっている。1日に1、2回が26.4%、3回以上が8.8%。1週間に1、2回25.2%、3回以上20.9%、一月に1、2回9.9%となり、あとは数ヶ月に1回とばらつく。接触頻度が極端に低いのは学部生に多いが、学習形態上仕方がないことかもしれない。

b：【会話の内容】 話す内容は、「研究について」が一番多く(74.5%)、次いで「専門の授業」(59.8%)、「学業についての問題点」(57.0%)、「日常生活での問題点」(41.5%)、「雑談」(38.9%)、「個人的悩み」(15.6%)、「その他」(11.5%)となっている。予測したとおり、学業・研究についての会話が多くのことが窺える。その中で、「専門の授業について指導教官とあまり話さない」という回答も18.5%ほど見られた。また、生活上の問題点や個人的な悩み等は話されないことが多いようである。

### 2. 指導教官とのコミュニケーションについて

a：【悩みを相談するか】 指導教官にうち明ける悩みとしては、「日本語や外国語能力について」が最も多く(59.6%)、次いで「学習や研究の価値について」(50.5%)となっている。意欲の減退や、自分の研究能力への疑問等は、留学生の多くが感じていないこともあり、打ち明ける率は低くなっている(意欲減退24.2%、能力への疑問31.9%)と考えられる。

しかし、「心や情緒に関わる悩み」と「対人関係の悩み」については約65%は全然打ち明けず、たまたに話す人でも18%前後にとどまっている。「健康の悩み」、「住居への不満」、「経済的な困窮」および「文化不適應」等は約半数が全然打ち明けないという結果が出た。

指導教官側のアンケート結果(I指導教官から見た留学生のコミュニケーション行動F「留学生はどのぐらい自分のことを話しているか」参照)でも、「多くの項目について「全然話さない」が全回答中の約半数を占めている事実」が明らかになっている。双方の結果を踏まえると、留学生は自らの否定的な状況に関して指導教官に相談をしないという実態が窺える。本論のB、C、およびDの項でも述べたとおり、留学生は、実際には様々にストレスや悩みを抱えている。しかし、約半数の留学生は、友人知人関係にも、指導教官にも十分にはコミュニケーションがとれておらず、胸中にたまっているものを吐き出せていない姿が浮き彫りにされた。

b：【指導教官とのコミュニケーションに満足しているか】 指導教官とのコミュニケーションは、言語を問わず90%が満足している。それは、指導教官とは学業生活上のコミュニケーションがうま

くとれることが重要課題であり、その他の悩み等の相談相手ではないと留学生が考えているからだ  
と推察される。しかし、留学生の問題は、日常生活、心身の健康の問題に起因することが多いため、  
それらを打ち明け、話し合える機関が、留学生にとってはぜひとも必要である。

c:【指導教官は積極的にコミュニケーションをとるか】 指導教官側からの留学生への働きかけを、  
留学生がどう捉えているかの設問については、多くの指導教官が積極的に留学生にコミュニケー  
ションをとっていると評価されている。項目別では、「学習・研究について」が84.0%、「外国語能  
力について」が62.6%と高くなっており、前述2a「悩みを相談するか」の回答と同様にお互いに自  
己開示しやすい項目がよく話されていることが分かる。また、留学生の「心身の健康」(67.4%)や  
「住居や経済問題」(67%)を気遣う先生も多い。しかし、「対人関係」については、30.1%の指導教  
官が全然話題に出しておらず、関心が低いとみられる。

## F まとめ

本論では、留学生のコミュニケーション行動を言語から離れた心理的側面から捉えることに視点  
をおいた。紙面調査ということもあり、具体的で詳しい回答を得ることは難しかったが、鹿児島大  
学の留学生の留学生活がおぼろげながら浮かんできた。

幸いなことに9割の留学生は、鹿児島大学の学業生活に満足している。しかしその一方で、精神的  
なストレスを強く受けている留学生も少なくなく、また経済問題を内包している留学生も30%近く  
存在しているので、学業以外にも物心の多岐にわたる支援体制が不可欠であることが認められた。  
そのような現状の中で、約半数の留学生が、大学内外において「心の許せる日本人の友人」がい  
ない等、対人関係の問題を抱えている。指導教官とのコミュニケーションは総じてうまくいっている  
が、当然ながら学業生活が話題の中心であり、対人関係の問題等、悩みなどを打ち明けることは多  
いとは言えず、留学生は、抱えたストレスや問題を自分で解決していかざるを得ない状況にあるこ  
とが明らかになった。

アンケートの分析の結果、回答してくれた留学生（有効回収率約52%）のうち10%に何らかの強  
い不適応を見いだした。今後、留学生にとって効率がよく有益な学業生活を送れるように、基本  
的な日常生活の支援体制、受け皿作りに、よりきめ細やかな対応が望まれる。言語的な壁もあり、コ  
ミュニケーションが潤沢に行われているとは言い難い留学生もあるが、そのコミュニケーションの  
内容も質の高い、豊かなコミュニケーションを交わしていかなければ、留学生生活の満足度は維持  
できないと考える。

(きずな学園 十島真理)